



妙たえ の 光ひかり

通刊77号 復刊57号

2007年3月10日(季刊)

角田山妙光寺 発行

〒953-0011

新潟市西蒲区角田浜1056

TEL 0256-77-2025

オ ナ ガ

境内には色々な鳥が来るが、いい条件で写真を撮ること
は難しい。そんな冬のある日、中庭の土の上でうずくまる
鳥がいた。頭が黒くて、羽と長い尾が鮮やかな青、胴は灰
色という特徴的な配色はオナガだった。

姿も色鮮やかなら飛び方も長い尾をヒラヒラさせてとて
もエレガントな感じがする。実はカラスの仲間だそうでそ
の鳴き声がギヤーギヤーと美しくなく、嫌われ者の鳥だと
いう。平地の雑木林や市街地に群れで住み、雑食性のため、
この鳥が増えると他の野鳥が姿を消すから嫌われるとも聞
いたことがある。

本州の中部地方以北にしかいないくて、関西の愛好家には一度はお目にかかりたい鳥だそうで、それほどに姿は色鮮やかだ。外見だけではその性格までわからないというところか。

戸と沢ざわ宗そう充じゅう法ほう尼に

小川英爾

夕食後何気なく見ていたテレビで尼僧さんを取り上げる番組が始まった。二時間のスペシャル番組で、壮絶な人生を経て苦勞の末尼僧となり、悩める人の相談に乗ったり救ったりしている、そんな尼僧さん五人が出てくるという。もしかして、と思つて関心を持つて見ているとやはり、戸沢宗充法尼が出てきた。最近新聞やテレビによく取り上げられるので、ご覧になった方もあると思う。

戸沢法尼は毎年八月一日妙光寺のお墓参りのお手伝いにかけているから、ご存知の方も多いと思う。先代住職の時代からだから四十年近くになる。皆さんのお墓でお経を上げるようになったのは、四十六歳で尼僧になってからのことで二十三年前からということになる。そう、今年六十九歳。その戸沢法尼と妙光寺のご縁を、平成十八年十一月十六日仏教ホスピスの会での講演をまとめた、同会々報『みちるべ』からの引用でお伝えしたい。

法尼は小学三年のとき母子三人満州で終戦を迎え、翌年九月に命からがら瘦せかけて引き揚げてきた。抑留されていた父親も五年後に帰国、一家四人貧しいながらも幸せな娘時代を過ごす。やがて知り合つた男性がクリスチャンだつたことから、自分も洗礼を受けて入信し敬虔な信者とし

て毎週教会にも通つた。

長男が小学校一年のときに次男が生まれた。その二日目、「また来るよ」と手を振つて病室から出て行つた夫が、交通事故に遭い二度と戻らなかつた。急いで家に帰つたが葬式は済んでおり、遺骨になつた夫の死を受け入れることはできなかつた。教会の先生は「いまだ天国で教えを知らない人たちに伝道するため、神が必要とされたのです」と言つた。

そのとき戸沢法尼は「生まれたばかりの子を置いて、妻子を路頭に迷わせてまで神は必要とすれば天国へ呼ぶのか。神様つてなんて勝手なのだろうと思ひました。そして私も天国に行こう。それには死より他ないと考えました。かと言つて薬は手に入りませんし、入水しても泳いでしまふだろう。首を吊つたらどんな無残な姿になるか、それは満州で随分見てきたので絶対に嫌。電車で飛び込むしかない」と一途に考え、何度よく進してくる電車に身を投げ出すうとしたかしれません。ところがあるとき、踏み切りの向こう側に立つていた女性が私より先に飛び込んでしまひ、その無残な姿を見た私は腰が抜けて動けなくなり飛び込めませんでした」

苦しんでいたときなぜか夫の書棚にあった『法華経』と『日蓮聖人のお言葉』がフツと目につき、食い入るように読んだ。やがてお寺に行き「南無妙法蓮華経」とお題目を唱えるようになり、なぜか涙が出て仕方がなかった。お寺に通い続け、残された二人の子供を一所懸命育てていく、これが夫の死を無駄にしない生きかただと気がついた。

そして縁あって日蓮宗の教団本部である、宗務院の伝道部に勤めるようになった。当時その部長だった私の父で妙光寺の先代住職から、ある日「戸沢さん、夏休みは何か予定はあるの？。よかつたら新潟に来て八月一日のお墓参りだけちょっと台所をお手伝いしてもらって、あと子供たちを海で存分に遊ばせてあげてはどう？」と誘われた。「お金が無くて子供をどこにも連れて行けないでいたとき、小川部長のお言葉がどんなにうれしかったかわかる？。以来妙光寺さんに負担をかけないようにと、缶詰を買い込んで子供たちのリュックに詰めて毎年お世話になったのよー」と当時を明るく語る。その長男も僧侶になって、いま静岡で住職を勤めている。

こうしてキリスト教信者から立派な仏教信者になった戸沢さんは、さらに多くのご縁から、世の中で迷い苦しんでいる人たちに仏様の教えを知ってもらいたいと、四十六歳のとき尼僧として出家した。そして布教の勉強を続けるうち、語るだけでなく尼僧として何かするべきではないのかと考えるようになった。そこで夫や恋人からの暴力で逃げ場を失っている女性が多いことを知り、その女性たちを受け入れる現代の駆け込み寺を作りたい。中世の

ヨーロッパにあったという「アジール」という駆け込み施設のように、林に囲まれた建物を想像していた。

すぐにある企業が手放した温泉つきの保養所が見つかった。そのときすでに六十五歳。貯金も無く、融資する銀行だつてあるわけがない。その年の八月、意見を求められた私は無謀だからやめたほうがいいと強く説得、お酒も入って激しい言い合いになったことを記憶している。しかし数カ月後、趣意書と親しい住職たちに宛てた資金協力を依頼する文書が私のもとにも届いた。強く反対した手前ほうつてもおけず、僅かなポケットマネーを出させていただいた。

岩も通す一念はどうとう融資してもいいという銀行を見つけた。係りの女性行員は「お坊さんってゴルフ焼けてベンツに乗っているのが私のイメージです。そのお歳で経営もなりたないことに、何故一五〇〇万円も借金までしてまでなさるのですか？」と聞いてきたという。後日、戸沢さんが熱い思いを綴った新聞や雑誌の記事を読んだ部長から「感動しました。融資しましょう」と言ってきた。かくして平成十五年八月、改修工事を終えて開堂供養にこぎつけた。

しかし開堂したからといって宣伝して人を集める趣旨のものではない。誰も来なくて一人で管理している状態が続いた。そんなとき私のところに、親しくしている読売新聞のデスクから「一人で頑張る各界の人を特集するのですが、お坊さんでそんな方を紹介して欲しい」と言ってきた。すぐに本人の同意を得て戸沢法尼を紹介したところ、早速記者が連絡を取って現地へ取材に駆けつけた。力のある若い

女性記者だったことも幸いして、戸沢法尼の活動にすっかり感銘し、平成十七年七月連載記事の第一回目に紹介された。連載の一回目は読者を引き付けるために特に扱いが大きく、写真も記事も特大になる。

これを機に、以降テレビ、ラジオ、雑誌に取り上げられることになり、毎日「行っていいですか」と電話がかかるようになった。これまでの三年で四五〇人ぐらいの方たちが来ては去りしていった。ある大学の先生からの手紙に「死に人に線香を手向けることも大切ですが、現に生きている人々に希望と安心というロウソクの光を差し向けることのほうが、より大きな行為であることを教えられました」とあり、本当に力づけられたという。

駆け込んでくる人たちが受けている暴力は、私たちの想像をはるかに超える凄まじさだという。女性の殆どは左の鼓膜が破れている。右手で殴られるからだそうだ。それでも何故逃げないのか。それは恐怖で動けないからだ。また、逃げ来ても必ず帰っていく。何故か。その男性たちが優しいから。それを思い出し、私がいたらなかったから、私がかんとしてやれば彼は暴力をふるわなかったに違いない、と思い出して帰っていく。

「殺されるかもしれないから絶対に帰っては駄目、と言っても帰る。そしてもっとひどい暴力を受ける。優しくしたり殴ったり、この繰り返しが特徴です。そして私がいけないから、と。そうではないのです。私がいけないのではなく、暴力がいけないのです。暴力を受けるのを我慢することは自己を否定することになります。その結果、殆どが

うつ病になっております。」

「夫や恋人だけでなく子供からの暴力もあります。あるとき、七十六歳の老夫婦が大分県から来ました。『いつ行こう、いつ行こう』と思って一年が過ぎました』と、ボロボロになった前述の読売新聞を握りしめていました。三十五歳の息子が明日五十万円用意しろと行って暴力をふるうので逃げてきたという話でした。」

「ある編集者が私を取材して、最後に言いました。『うつ病は薬では治りません。カウンセリングでも治りません。こういう所が必要だということを知りました。私の妻は三年前にうつ病で自殺しました。病院を転々として、カウンセリングもいろいろ受けたけれども治らなかった。三年前にここを知っていたら妻は死ななくてもすんだのに』と泣いていました。」

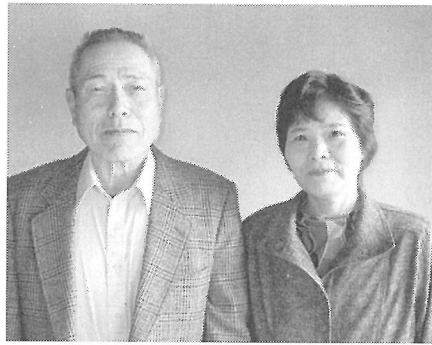
この言葉を聞いたとき、これをやって良かったと強く思いました。至らないながらもひとりの仏教者として、今、生きている人たちの苦を見つめて生きていける喜びを感じました。

御仏は『この世の苦を見つめて生きよ』とおっしゃいました。来年は七十歳になりますが、こうやって元気で過ごさせていただくのも御仏の御心に適ったことかなあ、仏様がここにいて助けてくださるといふ強い信仰が、こういうことをさせていたいただいているのだろうとつくづく思います。」

以前にもあったが、近いうちにまた戸沢法尼に直接語っていたら機会を妙光寺で作りたいたいと思っている。

元気な母ちゃん、おっとり父ちゃん

内 藤 三 夫さん（六十九才）
 イ キさん（六十八才）



三夫さんの
 婿入りで二人
 は一緒になっ
 た。当時イキ
 さんの家は貧
 しい農家で、
 屋根は雨漏り
 し畳の敷かれ
 た部屋は一間
 しかなく、あ
 とは板の間に
 ワラヤスゲの
 むしろを敷い

ていた。父親が病身で九反の田んぼは母
 親とイキさんが担っていた。弟が一人い
 たが小学生の頃から「こんな貧しい農業
 は嫌だ」と言い、学校を終えると関東に
 出て行ってしまった。こんな毎日にあっ
 て、母親は妙光寺裏手の岩屋の七面様を
 熱心に信仰し、一晩中の月参りを欠かさ
 ない人だった。
 ある年の春、田んぼの苗作りに失敗し
 て親戚に分けてもらいに行った。そこで
 「いい婿がいるよ」と紹介され、改めて本
 家と母親とイキさんが先方を訪ねた。「あ

のとき親と兄だけが私らの前に座って、
 本人は別の部屋にいたんだよ。どっちが
 私の相手なのかわからなかった。どうせ
 なら別の部屋の人のほうがいいなって、
 思ったけどね。でもあんたあの頃意中の
 人がいたんだよね」とイキさん。「ウー
 ン、忘れたな」と三男さん。

すっかり気に入った母親の誘いで、三
 男さんはすぐに内藤家にやって来た。そ
 のまま三ヵ月後に結婚式を挙げる二週間
 前まで戻らず、式の前日に布団となぜか
 下駄箱を馬車に載せてやって来た。以来
 四十五年がたった。いま、明るく活発な
 イキさんと、物静かで責任感の強い三男
 さんの仲はとても微笑ましく見える。

イキさんは母親が三十三歳のときの初
 子で病弱に生まれた。それが名前の由来
 で、子供の頃も一人遊びが好きで引込
 み思案な性格だった。結婚後夫婦で農業
 をやったが機械化の流れについていけ
 ず、近くにブルボンの工場ができたのを
 機にやめて正社員の一期目として二人で
 採用された。このとき、朝早くから夜暗
 くなるまで働く周囲の農家の人たちを目
 にすると、勤め人になったの自分たちは

これでいいのか、随分悩んだという。誰
 にも負けないくらい一所懸命頑張ればい
 いんだと考え方を変え、以来すっかり健
 康で明るい性格になった。

定年まで勤め終え、イキさんは厚生年
 金が満期になるまでと今度病院の清掃
 係を三年、その後も頼まれては旅館の仲
 居、親戚の飲食店、スーパー、今はパチ
 ンコ店の清掃係に精を出す。旅館に勤め
 たときは女将が直々に頼みに来て、勤め
 てからは帰りが遅いせいもあってタクシ
 ーで送迎されたという。社交ダンス、カ
 ラオケといった趣味にも積極的だった。

二人にも辛いときがあった。長女は嫁
 ぎ次男を分家に出した後で、頼りにして
 いた同居の長男が北海道に住む親戚関係
 にある一人娘と結婚すると言い出したの
 だ。若い二人の強い意思を止めることは
 できず、三男さんは心労から胃潰瘍にな
 りすっかり老け込んでしまった。さらに
 そのお嫁さんに病気が見つかった。その
 とき高額な治療費をイキさんはへそくり
 を吐き出して仕送りした。いまではお互
 いを気遣う関係になっている。

二人暮らしになった今、三男さんは昨
 年春まで寺の世話方を勤めてくれた。イ
 キさんは「すっかり元気になってこうし
 ていられることを親と仏様に感謝してい
 る。まだ忙しくてお仏壇参りは朝晩手を
 合わせる程度だけど、お経が覚えたくて
 来月のお寺の参籠研修に申し込んだ。仕
 事を辞めたらもっともっとお参りさせて
 もらいます」という。

住居表示変更他

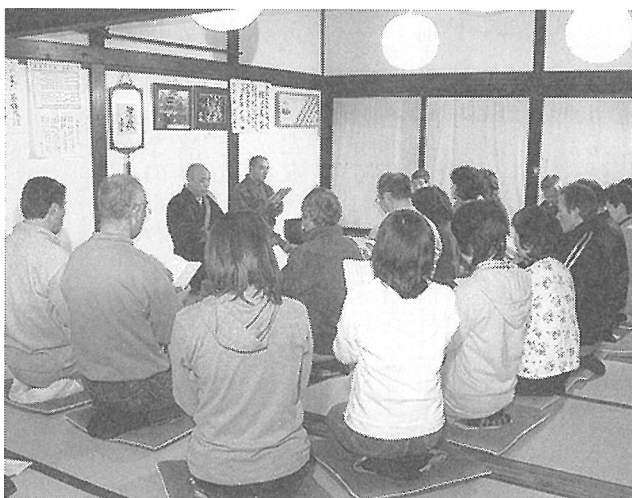
● 住所表示が再度変わります

新潟市が四月一日から政令指定都市に移行することで新たに区政が引かれ、住所に新しい区名が入ります。妙光寺の住所は 新潟市西蒲区角田浜一〇五六となります。郵便番号、電話番号は変わりません。

妙光寺から皆様へのご連絡は名簿の訂正に時間を要しますので、徐々に変更してまいります。ご了承ください。

● お経練習の会五夜

妙光寺の地元角田浜には現在二十件弱の檀信徒がおられ、その中の主に女性たちが月一回、会場となるお宅に集まりお経の会を開いています。ところが皆さん七十台と高齢化し世代交代が進まず、集



大広間でお経練習

まる人が僅かになってしまいました。そもそもは三十年余り前に一冬寺に通い、先代住職からお経を習ったことがきっかけで始まった会でした。



そこで次の世代で年代の近い人たちがお経を習ってはどうかの声を機に、この冬毎週日曜の夜五回寺に集まりました。四十代五十代の十七人、夫婦連れも五組あって、七時半から九時まで、足の痛いのも忘れて熱心に練習しました。お経と太鼓の練習のほか、正座のこつ、焼香の仕方から香の話、熨斗袋の包み方、さらには優しいお経の話等々、質問も交えて和やかな会でした。



台所で打ち上げ懇親会

最終日は夕方集まり本堂でおさらいしてから、寺の台所で打ち上げ懇親会。会費と材料持ち寄りので得意料理を作り、夜遅くまで話しがはずみました。

感想も「とても為になつたので継続して欲しい」との声が大半でしたが、「土曜の夜なら参加する人ももっと増える」、「世代の近い人がいい」等々の意見もありました。今後検討して、次の世代がもっと集まる妙光寺にしていくきっかけになればと思っています。

● 前寺建設進行状況

前号でお伝えした前寺「京住院」の建設計画は、四月中に行政の許可を得て、五月には着工の予定で進行中です。建設予定地は樹木を伐採して建物を建てることとが一切許可にならない保安林指定区域だったこと。しかし現実には樹木が一本もなく、さらに土地の公正図が不正確で区域の特定が困難なこと。これらで県の担当窓口との折衝に時間がかかっています。

この事前協議が困難を極めたのですが、安穩廟の縁で檀徒になられた県職員

のHさんが並々ならぬご尽力くださり、また角田浜出身の県幹部の方のご指導をいただき、道が開けたといえます。

計画では十一月ですが完成しますと、最近希望が多い家族を主体にした簡素な葬儀の会場にもゆつたりとお使いいただけます。建物と外溝工事一式は埼玉県のKさんのご寄付によりますが、安置する仏像の修復費用が想像以上にかかることがわかり、思案しています。つきましてはお力添えいただけます方を募ることにさせていただきますました。別紙の通りですが、お気持ちがありご都合のつく方のご協力をぜひともお願いします。

● 研修生の動向

昨年十月から修行僧を目指して研修に入った矢部は、妙光寺の仕事を勤めながら研修を続けています。現在は本格的なお経の練習に入り、二月の寒中には他寺院での寒修行にも参加しました。華道と茶道がそれぞれ月二回、合間に料理の講習、毎週のレポート提出もあります。近々書道と、漢文の講座も始まります。

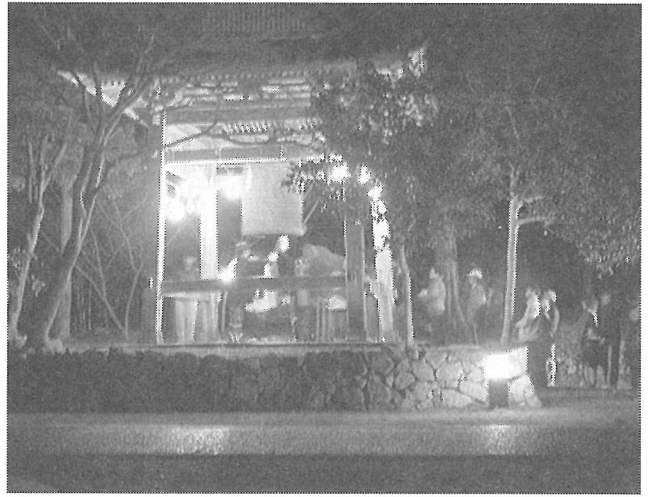
僧侶になる第一関門としての得度式（とくどしき）を、お彼岸の法要に合わせて行います。ぜひ皆様のご参列をお願いします。その後四月に、千葉県清澄寺で宗門の研修と式に出席します。

この二月、新たに研修生を希望する応募者一名があり総代さんと面接しました。比叡山で二年間の研修を受けたという方でしたが、年齢がやや高かったことと、素養の面で難があり採用には至りませんでした。今後も引き続き募集を継続していきます。

● 除夜の鐘賑わう

暖冬のせいかな年末年始も快晴で暖かく、たくさんの方のお参りをいただきました。ことに除夜の鐘は二五〇人ほどのしかも若い人たちが賑わいました。二〇〇用意した縁起物の当る抽選くじが足りなくなったり、コンニャクもきれいになるなど嬉しい悲鳴でした。

鐘を撞く人の行列の長さに、諦めて帰った方もかなりおられたようです。整理券を用意するのですが、集中するので混



除夜の鐘

雑して行き届かないのです。トラブルは全くありませんが、せめて火のそばで順番待ちができるよう今年是对応策を考えます。

● 松くい虫防除

全国的に松枯れの被害が進行中で、角田浜の海岸線も一時納まったかのようにでしたが最近また目立ってきました。境内には枯らしたくない古木が三十本余りあ



松くい虫対策

り、枯れた場合はその処理費用も大変です。海岸線の松林は薬剤の空中散布ですが、境内は無理なので一本ごとに薬剤注入を行います。その経費が三年ごとに十五万円かかりますが、効果はいまのところ確かです。しかしこの方法は幹にドリルで穴を開けて注入するので、木に悪影響があるのではないかと心配されます。最近根本から吸収させる新しい薬剤が承認さ



昨年のお稚児さん

れたそうので、今後こちらを検討して行きます。● 三つ子が二組のお稚児さん 四月二十九日の伝統行事『ご判さま』には稚児行列が恒例です。ここのところ少子化で希望者少なく困ることが多いのですが、今年には三つ子が二組、双子が一組、早くに決まりました。檀信徒、安穩会員の可愛いお孫さんです。今年には桜の

開花も早そうですから、満開の八重桜の下を稚児と雅楽が先導するお練りの列が見られることでしょう。お参りにお出かけください。

● 大宝寺落雷火災

総額七、八七一、七八八円

昨年八月十二日、落雷で焼失した県内聖籠町の大宝寺さんに対し、復興義援金を日蓮宗新潟東部の寺院五十カ寺で募りました。妙光寺でも皆さんにご協力をお願いしましたところ、最終的に二八六、〇〇〇円が寄せられました。この金額を一月十五日に取りまとめの新潟東部宗務所へ確かにお届けしました。

このたび寺院及び檀信徒等からの義援金総額が七、八七一、七八八円との報告とお礼が、宗務所長から届きました。ご協力いただきました方々にご報告申し上げます、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

● ホームページリニューアル更新

インターネットでの妙光寺紹介ホーム

ページがともよく見られています。妙光寺で検索すると全国の妙光寺のなかで一番出てきます。多忙でその内容更新が昨年七月からできずにいたのですが、このたび新たな写真も加えてページも増やし、前版的に更新しました。今後一部内容更新は本誌と対応して年四回行っていく予定です。

ライブカメラを置いていつでも生の妙光寺が見られるようにしたいのですが、いまだにISDNで、先ごろ光ファイバー敷設要求の署名簿を地域で出したのですが見通しはないようです。とりあえず、撮り貯めた写真で四季の境内をご覧いただけるようにしていきます。



ご案内



● 得度式のご案内

修行僧を目指して研修中の矢部の得度式（とくどしき）を、左記の様にお彼岸の法要に併せて執り行います。これは僧侶としての最初の関門で、これを終えて半人前の僧侶、沙弥（しゃみ）となり、これから本格的な修行、研修が始まります。

皆様には何のご用意もありません。当日参列いただき、暖かく見守り、激励の言葉でも掛けていただければ本人も喜びます。

三月二十一日（祭日） お彼岸中日 午前十時三十分

於・妙光寺本堂

（いつものお彼岸より三十分繰り上げますのでご注意ください）

● 参籠修行のご案内

第四回

「二泊二日初めての参籠修行」

参籠（さんろう）とはお寺に修行の目的で宿泊することをいいます。

趣旨・妙光寺に宿泊してお経や作法

の基本を経験し、住職や参

加者同士が語り合い交流を

はかります。さらに写経を



参籠研修

体験し、国の登録有形文化財である三重塔に納経します。難しいことはなく、どなたでも参加いただけますので、ぜひお気軽にどうぞ。

期日・四月七日（土、日）

対象・妙光寺の檀信徒、安穩会員、その同伴者ならどなたでも。定員・十五名

費用・一人一万円（一泊三食、写経用品を含む。）

日程・一日目 午後一時半集合 講義 お経と作法の実習 他

二日目 朝のお勤め 写経 まとめ練習 法話 納

経法要

昼食後解散 希望者には午後個別相談

*申込締切・三月三十一日

*詳細は参加者に直接ご案内します

● 「ご判さま」のご案内

鎌倉時代に佐渡配流の日蓮聖人が、無事で鎌倉に戻れることを感謝して遺された判（印鑑）があり、これを江戸時代から毎年四月にご開帳してきたのが妙光寺の「ご判さま」の行事です。昭和三十年代までは盛大な祭りとして、文字通り境内に参詣者が溢れかえりまし



山門から本堂へ向かうお練の行列

た。いまはその面影を残すのみとなりましたが、日蓮聖人のご遺徳を偲び、本格的な春の到来を告げる行事として続いています。どなたでも自由に参拝いただけます。お出かけください。

尚、今年の当番は曾根・升潟地区。角田浜の方たちにはのぼり立て、輿担ぎ。それぞれお手伝い宜しく願います。

期日 四月二十九日(日・祭日) 日程は別紙のご案内

● 祈願、回向のご案内

この「ご判さま」の「志納袋」を県内の檀信徒に同封しました。当日十時三十分までにお持ちいただくか、事前にお送りください。家内安全や身体健全といった祈願は、十一時の大法要で読み上げ祈願しお札を差し上げます。施餓鬼塔婆は午後一時三十分の施餓鬼法要で塔婆を立てて読み上げます。

「志納袋」はないが申し込みたいという方は、お知らせください。お送りします。

● お稚児さん若干名募集

お練り(行列)と大法要に出仕していただくお稚児さんを募集しています。詳細は別紙で。定員を超えた場合は、外部から借りた衣装になりますことをご了承ください。

● 漢文講座のご案内

素人向けに初歩からの漢文講座を計画しています。漢文が読めるようになって、お経の世界、中国文化の一端に触れてみたという方、どなたでも参加いただけます。

研修生がお経を理解するために計画し、そこに近隣の若い僧侶も加えて行います。その話を聞いた安穩会員の女性の方から参加したいとの申出がありましたので、平日の夜に別立てで計画しました。五人以上集まらないと実現できません。

お一人でも、お友達等どなたを誘っていただいても結構です。講師は妙光寺に生まれ育った住職の兄で、安穩会員でもありません。決して難しくせず楽しくやる予定ですので、気軽にご参加ください。

内容(予定につき参加者の人数で変更になる可能性があります)

- ・ 月二回、平日の午後六時三十分～九時三十分
- ・ 夏は休み
- ・ 入門編は十五回通算八ヶ月
- ・ テキストは主催者準備(参加者負担)
- ・ 費用 一回二千元
- ・ 講師 小川陽一(東北大学名誉教授・中国文学)
- ・ 四月開講につき早めにお申込ください



各種情報

お出かけの際の車とお宿

妙光寺は交通が不便でご迷惑をおかけしています。自家用車を持たない方、県外からは新潟駅からですと内野駅下車でタクシーが最も早い手段ですが、三千五百円近くかかります。そこで少しでも費用軽減になればと、栄タクシーと契約し、専用の一割引券を用意しています。妙光寺発着に限りませんが、お帰りは何処まで行かれても妙光寺からなら一割引です。ご希望の方はお知らせください。

ところがこの栄タクシーが内野駅前前の営業所を撤退しました。その結果駅前にはほぼ常駐していますが、台数が減って不便をおかけすることがあるかもしれません。時間がわかれば電話予約も可能です。

自家用車で新潟市内から四〇二号線の海岸通りを利用される方には、もう少し



でさらに便利になりそうです。新川の河口に新しい橋の工事が急ピッチで、そのための取り付け道路の工事も松林を切り開いて始まりました。車社会のため公共交通機関は不便になる一方ですが、角田浜が新潟市になって自然環境が観光資源として注目されることで道路環境はさらに充実します。

県外からおいでの方に、気軽なお宿として「湯の腰温泉」をご紹介します。多かつたのですが、このたび廃業の模様です。四十歳代の当主が急死され、家族だけでは存続できないとのこと。土地の人たちにも湯治場として昔から親しまれた温泉で、残念です。経営者が代わって再開の可能性もあるかもしれませんが、その際は改めてお知らせします。

近い宿泊施設は海の家がありますが、こちらは夏限定。比較的近くて安価なの

は「ウエルサンピア新潟」があります。一泊二食八千八百円からで、施設もお風呂もきれいです。電話025-239-3232。ところがこちらも厚生年金施設ですので、今後の運営が危ぶまれています。地元では存続要望の署名を出したのですが。

かたや元気なのは妙光寺から車で五分、ワインで知られるカーブドッチ・ワイナリーです。これから温泉を掘って施設を拡充し、宿泊施設も計画にあるようです。また妙光寺の前寺が完成すれば、離れ式のゲストハウスとしてもお使いいただけるよう考えています。

世の中の動きが早すぎて疑問に思うこともしばしばです。ご不明のときはいつでもご相談ください。

フェステバル安穩

夏のフェステイバル安穩は十八回目になります。八月二十五日(土)の予定です。スタッフによる企画会議も既に開かれ、内容の相談が進んでいます。今年も楽しみにご予約ください。

「こころちよい時間」

小川 なぎさ



近くの上堰潟公園。農業用水を調整するために、もともとの湿地を整備した大きな公園です。池を含む広々とした湿地帯広がっています。一周二キロ

の遊歩道が整備されていて、冬ならば鴨や白鳥の興味深い姿を見ることが出来ます。釣りを楽しむ人、健康のために歩く人、子どもたちのための遊び場もあり、広がる田んぼの向こうには弥彦、角田の山々が一望できるし周囲にはさまざまな花や木々が植栽されているのであきることがありません。ここ数年私は犬の散歩で毎日のように歩いています。

お寺の周辺には他にも海やワイン工場周辺など、散歩には不自由しません。この公園の遊歩道は車も入れないので考えごとをしながら、あるいはぼけっと歩いていても危険がなくおよそ三十分間神経の休息になります。近く

の檀家さんから、朝晩二周づつ一日八キロ歩いたら血糖値が正常になった人がいるよ。と聞きました。がそうだろうなど納得します。本当に気持ちが良いですよ。

私も健康にはそろそろ気を使うべきなのでしょうが、自分のことに時間を使う余裕はまだなくて、犬がいるから歩くので一周がやっとです。けれど、この散歩の時間中は心おきなく考え事が出来る唯一の時間で、ここで「あつ」と思っただけの悩み事や、具体的な問題点の解決につながることは多くあります。

最近読んだ興味深い本について思い起こしながら歩いたこともあります。人間の魂は何度も生まれ変わる、という話を科学的に説明しようとする研究の話。魂は意識体といい、肉体が死んでも次の肉体に入ってずっと生き続けるらしい。書店でたまたま目にして買ったのですが、あやしげでもあり、

物語りとしても楽しめました。『生きがいの創造』飯田史彦著です。

元宮城県知事の浅野氏は走ることが好きで、何かを考えるために走るのだそうです。走りながら考え事ができれば、さらに健康になれるそうですね。暖かい季節がはじまります。ほんの少しでも自分にとっての気持ちの良い時間を作りたいものです。

写真の二本の木は大きな桜の木です。春の開花の時期の美しさは背景とよく調和して、うらかな桃源郷のようだと毎年楽しみにしています。公園の外のあぜ道にあるのですが、遊歩道途中の橋の上から見えません。



行事案内



・春のお彼岸法要 三月二十一日(祭日)

午前 十時

安穩廟法要(いつもより三十分早いのでご注意ください)

十時三十分 彼岸会中日法要・得度式

十二時

お斎

午後 一時

お説教(住職)

ゆっくりと過ごしていただけます。お斎はどなたでも当日受付で申込のうえ、食べていただけます。お出かけください。

・初級参籠修行 三月二十四、二十五日(土、日)

初めての参籠修行を終えられた方で、二回目三回目を合同で行います。

・初めての参籠修行 四月七、八日(土、日)

ご案内は10ページに

・やさしい漢文講座 四月中に二回予定

ご案内は11ページに

・「ご判さま」 四月二十九日(日・祭日)

ご案内は10ページに



あ
と
が
き



とうとう雪が積もることのない暖かい冬でした。元々積雪の少ない土地柄で、三十cmも積もると大雪、雪かきにいい汗を流すのです。同時に雪が積もると来客もなく、なぜか電話も少なくなつて心底のんびりできるのですが、今年はそれもありませんでした。心忙しかったのは、前寺再建のための再三にわたる県庁との折衝です。しかしこれも本当に多くの方に助けていただいて、見通しが立ったことに感謝の言葉もありません。(小川)